

MINAMI KYUSYU NO JOKAKU
南九州の城郭

第22号 #
南九州城郭談話会報 #
平成16(2004)年5月24日発行 #
#####

豊後府内の発掘調査と島津氏

坪根伸也

1 島津氏の豊後府内侵攻

天正14(1586)年12月12日、豊後府内に激震が走る。大友救援のために豊臣秀吉により派遣された四国連合軍が戸次川の戦いで島津軍に敗れさったのである。府内の中心部から約15kmでの出来事であり、府内は大混乱となった。

『豊薩軍記』には「島津中務少輔家久ハ守岡ニ一夜止宿シ、逆瀬豊前相良民部両入ニ軽卒百二十人相添テ府内ノ様ヲ点検セシメ、翌レバ上ノ原ト云處ニ天台宗圓壽寺トテ六坊アリ

シヲ本陣トシテ、其後大友ノ居城ニ移リ来年ノ三月マデゾ居ラレケル」とある。

「守岡」とあるのは、『豊後国志』に「守岡堡在津守郷曲村」として登場するものであり、現在、守岡遺跡(守岡城跡)として周知されている。守岡城は大分川を挟んだ府内中枢部の対岸に位置し、まさに府内の最終防衛ラインの一角を形成していた城館である。『豊薩軍記』の記載内容は、豊後府内攻略を周到に準備実行した島津家久の余裕とも取れる当時の様子を伝えている。



大友氏館庭園跡空中撮影写真(大友館第1次・3次調査合成写真)(大分市教委 2000)

こうして豊後府内は、なすすべもなく島津軍によって陥落し、灰燼に帰すことになったのである。



図1 中世府内町跡位置図

2 豊後府内と大友館

豊後府内は、大分川の河口付近の左岸に位置し、鎌倉時代から一貫して大友氏の拠点として機能し続けた。文禄2年の大友氏の豊後除国まで繁栄を続け、天正末期の島津侵攻後も部分的ながら復興を果たしている。

江戸時代の初期に描かれたとされる『府内古図』と明治期の地籍図等との対比分析から、昭和62年に「府内復原想定図」が作成され、現在の市街地上の南北2.2 km、東西0.7 kmの範囲に44以上の町を擁する巨大な都市が復元された。この「府内復原想定図」によれば、府内の中心には方二町（約200 m）四方の大

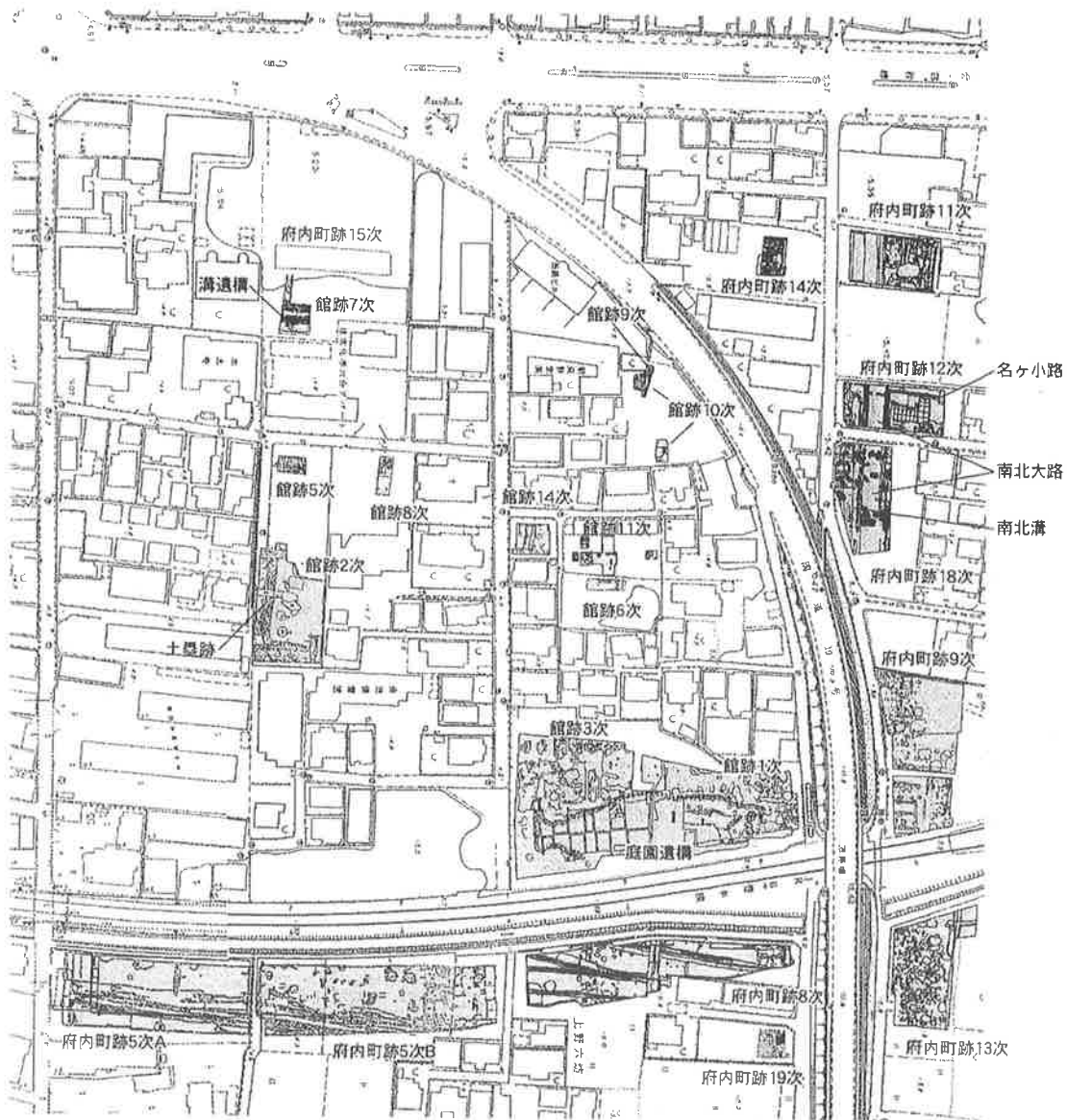


図2 大友氏館跡・中世府内町跡遺構配置図（大分市教委 2002）

友館が位置し、その周囲には南北3本、東西4本の主要街路により方形街区が形成されている。近年の発掘調査所見は、この方形街区の中に南北道路を基軸とした短冊状地割をもつ両側町の存在を明示し、いわゆる京都型の町並みを復元しようという指摘もなされている。

古図には町々の境に木戸表現があり、さらに南北道路に面する大友館東面には白壁築地に礼門と脇門に相当すると考えられる二つの門が描かれ、京都の町並みのみならず、洛中の將軍邸あるいは管領邸を彷彿とさせる館景観と都市空間を想起させる。

平成10年度に行われた発掘調査では、これを裏付けるように大友館の推定範囲の東南部分において巨大な景石を伴う東西83.6m、南北16m以上の規模をもつ庭園遺構が発見され、大友館についても想定図の位置での存在を確定するにいたっている。しかも、現在までの調査所見は、館周囲に堀や土塁といった施設は配置されず、非常に防御性の希薄なものであったことを示している。

一方、『府内古図』には描かれていないが豊後府内を望む上野丘陵の端部にはもう一つの大友館である「上原館」が存在する。

館は、自然地形を利用して北・東・西を造作し方形に整形したものである。北西部分には「郭」状の方形の張り出し部を形成する。館周囲には巨大な土塁が巡り、西・南・東面

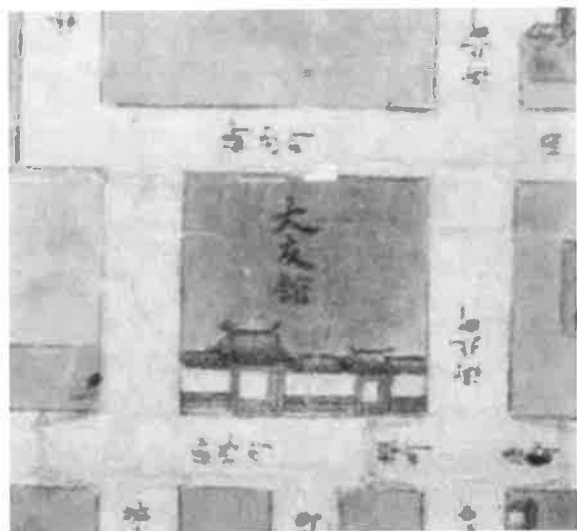
には堀の痕跡を認めることが出来る。南北に長い長方形プランを呈する主郭部は、土塁基底部で南北長156m、東西長112mの規模を有し、旧状を比較的良好に示す南側土塁の規模は現状で基底幅17m、高さ2.5mを測る。北西部の「郭」状の張り出しは自然地形を利用して整形を施したものであり南北40m、東西30mの規模を持つ。上原館は部分的な発掘調査の結果から、15世紀後半には存在していた可能性が指摘されており、さらに16世紀末葉には島津氏の府内侵攻に備えた改修の可能性が想定されている。つまり戦国末期には商業性、経済性を重視した府内中心部に位置する大友館と強固な防御性に特段に配慮した上原館という、風貌の異なる2つの館がそれぞれ機能を分担して豊後国の中枢に存在していたのである。

3 豊後府内の発掘調査

— 島津氏府内侵攻の爪痕 —

発掘調査は、大分市中心部に位置する大分駅の周辺総合整備事業により、その口火を切ることになった。

平成8年、推定「横小路町」とされる地点の発掘調査が同事業の代替地事業に伴う調査として実施され、「想定図」通りの位置に最大幅10mと想定される東西道路が確認されたのである（中世大友府内町跡第1・2次調査）。



『府内古図』に描かれた大友館（大分市教委 2001）



大友氏館 庭園跡



図3 上原館測量図 (大分市 1987)

翌年に行われた隣接地の調査（中世大友府内町跡第3次調査）では備前焼の大甕を10基据えた大甕埋設遺構（SX210），いわゆる甕倉の一部が検出され，商家の一角であろうと推定された。

この甕倉跡は大規模な火災により被災しており，出土遺物の年代観から島津氏により放たれた天正15年3月の業火によるものと推定されている。甕倉は焼失直後に火災処理が行われており，本来10基あったと推定される備前焼大甕は5基が遺存するのみで，半数はすでに抜き取られていた。残された甕内および抜き取り痕の中には多量の焼土とともに被熱した陶磁器類を大量に含む。出土陶磁器については，貿易陶磁器が主体を占め，中国をはじめ，朝鮮半島産のものが多い中で東南アジア産のものが一定量を占めている点が注目されている。これらの資料は，大友氏第21代当主大友義鎮（宗麟）が積極的に推進した「南蛮貿易」の実情の一端を示す資料として重要であり，タイ産のものを筆頭にベトナム産，ミャンマー産のものが出土している。さらに特筆

される事象として，東南アジア産陶器の大部分が貯蔵容器であるという点が指摘され，これらがコンテナーとして輸入された可能性を示している。

調査で確認される天正15年の焼土層は，限られた地点のみでなく，府内町の随所で確認することができる。大分県教育委員会が実施した中世大友府内町跡第12次調査は，大友館の前面に相当する南北道路と北面を通ると推定される東西道路の交差する南東角地に相当し，



推定「横小路町」遺構検出状況



大甕埋設遺構 (SX210) 検出状況

まさに当時のメインストリート沿いの繁華の中にある。

調査では天正14年(1586)の島津侵攻に伴うと考えられる焼土層に被覆されるように礎石建物跡が検出され、池状遺構や青銅製品の工房なども伴っており、ここも府内に居住した有力商人の屋敷地ではないかと考えられている。さらに、道路交叉点には、古図に描かれた通りの位置に木戸の痕跡も確認されており、『府内古図』の信憑性の高さが第12次調査においても実証された。

出土遺物には朝鮮産陶器碗をはじめとする輸入陶磁器のまとまった出土も認められ、茶の湯などに供される目的で集積されていた可能性も考えられている。また、これらの碗の中にはベトナム産の白磁印花文碗などもあり、この地点においても「南蛮貿易」による繁栄を享受した府内の姿を垣間見ることができる。ちなみに、同種の碗は島津軍と干戈を交えた激戦の地である大分市上戸次鶴賀城跡においても出土しており、府内周辺の拠点に広く流布していた状況を示している。

このように西洋の香に包まれ栄華の頂点を極めていた豊後府内は、島津軍による一瞬の業火により焼き尽くされ、その繁栄の日々に終止符を打つのである。

4 おわりに

平成15年度末段階において、すでに中世大友府内町跡で39地点、大友館跡で15地点の

発掘調査が大分県教育委員会、大分市教育委員会により実施され、巨大な中世貿易都市の実像が次第に明らかになりつつある。その終焉への道程にはいくつかのエポックの存在が知られるが、その中のひとつは紛れもなく、島津氏が深く関与したものである。遺跡中に「焼土層」として示されるその痕跡は、天正14年・15年の生活面を広範囲にわたって示すメルクマールとして、中世都市豊後府内の発掘調査において大きな役割を担っている。

(つぼね しんや)

参考文献

- 大分県立先哲史料館 1999『府内と臼杵から戦国の世界が見える 都市・貿易・民衆』
- 大分市史編纂委員会 1987「戦国時代府内復原想定図」大分市史 中巻 付図
- 大分市教育委員会 2000『大友館跡－発掘調査概報Ⅰ－』
- 大分市教育委員会 2001『大友館跡－発掘調査概報Ⅱ－』
- 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001『南蛮都市・豊後府内－都市と交易－』
- 大分市教育委員会 2002『大分市市内遺跡確認調査概報－2001年度－』
- 大分市教育委員会 2003『大分市市内遺跡確認調査概報－2002年度－』
- 河野史郎 2000「大友氏と豊後府内」『西京歴史フォーラム－大内義隆とその時代－』山口市教育委員会
- 木村幾多郎 2001「豊後府内城下町移転と旧府内町」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会
- 玉永光洋 2003「大友府内町」『戦国時代の考古学』高志書院
- 坪根伸也・高島豊 2003「大友館跡の遺跡庭園」『第8回中国・四国地区 城館調査検討会資料集 城館遺跡から発掘された庭園』中国・四国地区城館調査検討会山口大会実行委員会 山口市教育委員会

◆◆第22回例会“鹿児島県の埋もれた歴史遺産に光を”特別講演会報告◆◆

出口 浩 二

1 はじめに

今回は鹿児島国際大学生涯学習センターの特別講演会にドッキングする形で、平成16年1月31日(土)、穏やかな冬陽の中、鹿児島県庁前の鹿児島県市町村自治会館の4階大ホールで午後1時から5時まで開催された。

鹿児島国際大学生涯学習センターの特設講座の会員、南九州城郭談話会の会員、それに一般の参加者など、400名近い歴史ファンが続々と集まり、広いホールに人が溢れて、座席もほぼ満席という大盛況であった。

会は1部と2部に分かれ、1部は「鹿児島県の埋もれた歴史遺産に光を」をテーマに三木靖先生と服部英雄先生の特別講演会、2部は南九州城郭談話会の例会として、鶴嶋俊彦(熊本)、若山浩章(宮崎)、大窪祥晃(鹿児島)3氏の研究発表があった。以下その概要を記して報告としたい。

2 特別講演会

(1)「鹿児島県の歴史と文化を考える」三木靖(鹿児島国際大学生涯学習センター長・南九州城郭談話会会長)

天保14(1843)年、五代秀暁が総裁となり橋口兼柄等を指揮して各郷に調整させた名勝志再撰帳をもとに作成された「三国名勝図会」の中から「山城」と「八景」に焦点をあてて鹿児島の歴史と文化の一端を論じた。

ひとつは時代をリードした政治グループの拠点施設として、山城を中世社会の特有の施設としてとらえる視点である。中世においては県内全域に多数築かれたが、図に描かれたものはひじょうに少ない。山城の様子はほとんど記録されていないといってよい。山城図というと近世に入って消滅後に遺跡として描

かれたものばかりである。このような状況の中で「三国名勝図会」では鹿児島県全体に目配りした山城図の集成を行っているのであると、以下の17城を掲載順に拾い出して整理している。

1.平城 2.伴氏館 3.猫嶽・安養寺 4.平佐城 5.高城古城 6.木牟礼城 7.大口城 8.山崎古城 9.高城 10.平山城 11.伊作城 12.鶴ヶ城 13.平山城・高屋城 14.岩剣城 15.関白宮 16.加瀬田城 17.内城・松尾城

これらの山城には、守護や有力な領主の本城が含まれず、当時有力だった山城を選んだものではないとしている。歴史的に大切な山城、地域の中核となった山城、またその内容や規模、役割を考えて選んだわけではなく、ここでは、山城の総体的な流れを考慮して選ばれたものと周囲の居処や寺社に焦点があって、それに付随して掲載されたものがあると見なければならぬとする。そして、規模が大きく知名度の高い寺社のとり上げ方との対比的な差を指摘した。

さらにまた、絵図が大和絵風であること、現在判明している796の山城のわずか2%と僅少であることを問題視している。その上で、どの山城も緑豊かであることを示し、山城が大切に扱われていたこと、その鳥瞰図から山城の全体像の捉え方等の重要な視点をあげた。

2の鹿児島市伊敷の伴氏館については、中世山城中福良城とし、空堀1・2、曲輪1群・2群・外曲輪群、土居・土塁・道、大手と搦手などの縄張概要図を新資料として発表した。

「八景」については、中世に起源のある大自然の一部として景勝地を重視する考え方で、近世の目を見た「名勝」としての価値判断で

記録したもので、当時の文人のセンスを直接反映しているとしている。そしてこの名勝を記載した三国名勝図会を、鹿児島県の歴史を踏まえた、近世文化の代表的な存在であると結んでいる。

以上、江戸時代の終わりごろ編纂された三国名勝図会の山城と八景の記録内容の分析から鹿児島県の歴史と文化の一端を説明された。

主要かつ有力な本城等を除いた、わずか2%の17城の絵図ということについては次のことが考えられよう。三国名勝図会が藩命によって編纂されている以上、記載することのできないことに重要な意味が含まれていると思われる。それは薩摩藩においては、中世の山城自体が、軍事上・政治上、近世においてもまだ重要視されており、厳重に管理された機密としての意味合いを有しているからではないだろうか。

(2)「鹿児島県の文化的景観を考える」—城と地名を手がかりに— 服部英雄(九州大学大学院比較社会文化研究所教授・南九州城郭談話会会員)

「文化的景観」「歴史的景観と風土」「景観遺産」等の言葉は日本において近年叫ばれ出した耳新しい言葉である。これらを地域に古くから残る城や地名に焦点をあてて、迫って行くというのが服部先生の主旨であった。現代に残された風景から過去の痕跡を読みとって、新たに浮かび上がらせようという方法である。

鹿児島県のみならず九州各地の古い地名をあげてその意味を検討し、文化的・歴史的景観の重要性を指摘された。

- ・文化的景観 麓集落やかつての耕地風景
- ・歴史的景観と風土 知覧町の武家屋敷、かつての甲突川五石橋、開聞岳・桜島
- ・地名
- ア 風土に応じたもの ・海—フタツセ ・山—イラクボ、イラハラ、イランダイラ、ベ

ベノヒラ、カンネンダイラ、ユイノタニ
イ 歴史的なもの ・貝塚—かきづか、しじみづか、かいづか、かいだ、かきからやま
・古墳—ひょうたんやま、ひさごづか、ふたごやま、びわづか、ふたづか、ことづか、くるまづか、まるづか、まるやま、おおまるやま、つるまきやま、おおつかやま、おにづか、ふとづか ・のろし—火の山、日尾、日ノ隈
・古代の国道—くるまじ(車路)

ウ 城関係—じょう、しんじょう、にいじょう、たかんじょう、なかんじょう、かまえ、かこい、ゆんば(射場・弓場) ・大分—牟礼 ・高城—高いということが重要。

・要害—寄居(関東) 切寄(豊前・豊後)
エ 知覧城の場合—克蘭ジョウ(蔵之城)、イマンジョウ(今城)、インバジョウ(弓場城)、セキツドンジョウ(式部殿城)、イズヤシキ(伊豆屋敷) ・こわけ地名—ヨコババ、サンサ屋敷、ウエンムラ、カジヤサコ、マチバタケ、モイヤマ、ホイウツ(堀内)

オ 筑前立花城の場合—白岳・イバノオ(弓場尾)、オオタヲ、松尾山、大ツブラ、小ツブラ、井楼山、馬責め、馬場、大一足、小一足

カ 町場—城下、げば、いっぬんばば
キ 犬ノ馬場—伊集院下谷口、加世田麓、金崎花瀬、末吉郷、諏訪方村、入来二牟礼、市来村、国分上小川、垂水田神、諸県郡砦村、志布志隣、菱刈前目、肝付宮下

ク 唐房(唐坊)—博多津、北九州・福岡宗像・津金崎・唐津佐志、琉球久米村「唐宮」「唐榮」「唐館」「唐人屋敷」、福岡姪浜 下山門「当方」「今東方」「稲当方」「船倉」「古川」長崎市矢上「東方」松浦大崎「東防」 ・鹿児島県 川内五代「とうぼう」垂水市「当房比良」加世田別府・小湊「当房」加世田益山(当房園)喜入生見「東方」「東房」

ケ 備後国大田荘—ツクダ(佃)、カドタ(門田)、ヨウジャク(用作)、ミソウサク(御正作)、早魃、飢饉時に大豊作

その他「歴史の反復性」「城の位置と高さ」等。

服部先生の九州各地の歴史的な、また風土に応じた地名が溢れる泉のごとく次から次に限りなく出てきて、また、その地名には深い意味があることがよく理解できた。歴史的な地名の重要性を認識した次第である。

「とうぼう」に関連するものとして、筆者の生家の日置郡市来町港町には、「とじんまち」と呼ばれる一帯がある。かつて吹上浜の北端の港町として栄えた頃の「唐人町」に当たるものではないかと母親から聞かされた記憶がある。調査の必要があろう。

城の地名については、説明された知覧城の例をはじめとして南九州には多く残っているように思われる。鹿児島市の南部で南北朝時代、南朝方の地方豪族として勢力を張った谷山氏の居城、谷山城一帯の現在に残る地名をあげておきたい。「嶋堀」「壺条」「桜馬場」「愛宕城」「板落」「陣ノ尾」「本城」「陣ノ平」「内ノ丸」「馬場」「坊屋敷」「御所原」等である。

3 例会・研究発表

熊本県・宮崎県・鹿児島県から各1名ずつ南九州城郭談話会員が発表を行った。

(1) 相良軍派兵地とクマ陣・クマ城

鶴嶋俊彦(人吉市教育委員会)

人吉相良軍の派兵地でクマ陣・クマ城の地名の残る陣・城名やその他の派兵地等18ヶ所をあげ、城の別名・所在地・立地・相良氏使用年代・出典・参考事項等を緻密にあげた表をもとに説得力のある説明がなされた。

陣・城名では「熊陣」「球摩陣」「救麻陣」「玖摩陣」「隈之城」「九万城」である。所在地は鹿児島県は川内市、樋脇町、入来町、薩摩町、菱刈町、喜入町、野田町、隼人町、大口市、枕崎市、高山町、宮崎県は都城市、えびの市、日南市、北郷町、熊本県は水俣市、小川町である。鹿児島県では薩摩半島に多く、南は枕崎まで、大隅半島は少ないが高山町までに及

んでいる。

相良氏の推定使用年代は川内市隈之城の永和元(1375)年から、熊本県小川町の九万城の天文3(1534)年まで、14世紀の後半から16世紀の前半まで約160年間である。その中でも15世紀代が11城と最も多い。また、応永年間と文明年間に集中すること、クマ陣が15世紀代に出てくること等の特徴をあげた。

鶴嶋氏の資料には伝承・伝説等でなくその根拠となる古文書の出典名と記された事項が参考事項として付け加えられており、説得力の強いものであった。中世における三州の争乱は長期間に及ぶものであるが加久藤山系以北の人吉を根拠地とする相良勢がこのように南九州に出陣してきていることにみな驚きを隠せない様子であった。

鹿児島における発表で、やや押さえ気味の鶴嶋氏の発表であったが、質問・反論もこれなく完璧に相良勢にしてやられた感じで、薩摩勢としては実に残念なことであった。

(2) 近世の村から見上げた城

若山浩章(宮崎県立養護学校)

中世に築城され、実際に使用された山城の近世における取り扱いについて、都城市史編纂に伴う都城島津家文書調査の中から三つの絵図をもとに考察した。

・野々三城(都城市)の場合、各曲輪の諏訪城→神社・畠、尾崎城・石垣城・八幡城→惣山、平城→畑、取添→地頭屋敷・郷士屋敷としてそれにリンクされるように形成される麓の意味から、麓が城を管理する様相を読みとり、城は本当に死んでいるのか?という重要な問題を提起した。また、曲輪の一般的な名称である「西捨」「取添」「平城」「野首」を特殊な機能を有するものとして、16世紀以後の城郭構造の変化を示唆した。

・「庄内地理誌」収録の村絵図に描かれた安永城(都城市)の場合、描かれている「各門」

「郷土屋敷」「寺社」「安永城」「河川と道」と描かれていない「地頭仮屋」「庄屋宅」等から、村の景観の基本構造を「城－郷土屋敷－門(同心円的な構造)」として、城を背負うことに郷土の重要な役目があること、そして村絵図に描かれた「安永城」に、郷土の頂点にある象徴的・権威的な存在としての重要な意味付けがあることを指摘した。

・梶山城(三股町)の場合、その文面から城絵図が、古くなったら写しが作られ、また追加の書き込み等がなされて、絵図が使われながら伝承されてゆくことを説明した。城の存在が近世においても永々と地域の人々に意識されているということであろう。

若山氏の視点は中世の山城を近世において人々がどのように見、どのように取り扱ってきたかをわずかに残された城図や村絵図・文書から論究するもので、曲輪や土塁等の遺構や出土遺物から、城の構造や時期を追求する考古学的な調査と異なって、ひじょうに刺激的である。そこには城を見る人々の心の動きが臨場感あふれて、浮かび上がってくるからである。数年前「上井覚兼日記」の史料の一つから山城の見方について論及されたことがあったが、その時も考古学の調査では解明することのできない、人間の心の動きを的確に読みとったものであり、強く印象に残ったものである。

発表資料にみられる「村から見上げた城」城固有の名称が「当時からそのように呼ばれていたか?」「郷土社会にとって城跡はどのような意味をもっていたか?」「城は本当に死んでいるのか?」等、聞き手に問いかける攻撃的な呼びかけ文で緊張感が増したのも事実である。

(3) 志布志城跡の調査概要

大窪祥晃(志布志町教育委員会)

鹿児島市の鶴丸城跡にある黎明館の常設展示にある志布志城の模型は全国でも最大規模

の山城模型で、多くの曲輪と建物、それを囲む土塁、縦横に走る深い空濠等、緊迫あふれる見応えのあるもので、行くたびに見入っている。志布志町は平成15年から確認調査を実施し、また、1月25日には「志布志城址シンポジウム2004」を開催して、南九州最大規模といわれるこの山城の整備・活用を志向している。今回の大窪氏の発表も時期を得たものであった。

志布志城は前川河口付近、シラス台地の先端部にある内城・松尾城・高城・新城の4城を総称して呼称するという。これらの各城にトレンチを設定して、以下のことを確認している。

- ・内城跡 本丸上段で建物跡が検出された。柱跡が北東方向に約2.5mの間隔で3基、北西方向に約2mの間隔で1列、柱跡には平石が配されるものと、柱穴に石が入るものがある。
- ・松尾城 二ノ丸の土塁は切り土塁であること、二ノ丸、三ノ丸から15~16世紀の青磁・白磁・土師器・陶器等の出土したこと。
- ・高城 北曲輪の堀はシラスを削り込んだもので、堀底は通路として使用されたこと、新城と対応する曲輪の西側の土塁がシラスを利用した盛土塁であること。
- ・新城 武道館付近とテニスコート裏の土塁は盛土塁であること等である。

南九州最大規模という広大な山城の範囲の中の極小さな面積の確認調査であるが、遺物・遺構ともに、何かを予感させるものがあり、秘めたる志布志城の魅力に引かれる思いがしたのは筆者だけではあるまい。

以上、3人の発表のあと、3県の近年の城館調査の概要報告があった。宮崎県は木城町教育委員会の白岩修氏、熊本県は鶴嶋俊彦氏、鹿児島県は知覧町教育委員会の上田耕氏が報告した。

4 おわりに

「鹿児島^①の埋もれた歴史遺産に光を」をテーマにした、鹿児島国際大学生涯学習センター特別講演会は、第1部に講演2本、第2部に城郭研究報告3本の実に密度の高い充実した会であった。広い会場も溢れるほどの参加者とこれらの人々の熱気が満ちてはちきれんばかりの状態であった。研究報告の鶴嶋・若山・大窪各氏の発表もかねての例会と違って、声に一段と力がこもり、心なしか顔も上気しているように感じられた。

会場の後面には、南九州の歴史研究には欠かすことができない「三国名勝図会」がどん！と置かれ、また壁面は生涯学習センターの2003年度の特設講座で三木先生の指導する「島津家文書を歩く」の各見学地の学習活動の写真パネルが展示され、大いに雰囲気盛り上げていた。筆者にとっては近年まれにみる内容の濃い大盛会として強く印象に残るものであった。

最後に若干の感想を記して、例会及び特別講演会の報告のまとめとしたい。

三木先生の三国名勝図会における山城の取り扱いは、寺社の「規模が大きく知名度の高いものが選ばれたと思われるのとは対極的である」と分析し、さらに、山城の絵図はわずか17ヶ城、県本土中世城館の約800の2%とわずかで、しかも大和絵図であるとし、「守護の本城だった山城は含まれていないし、有力な領主の本城も網羅されていない」と指摘しているのは重要である。このことは逆にいえば中世山城自体が近世においても、重要な意味を持ち軍事上の機密であることを考えさせるからである。

近世における山城のとらえ方を若山氏は「村から見上げた城」とし、「城は死んでいるか？」と問いかけた。そして、「城を背負うことが郷土の役目」とし、城を「郷土の頂点にある象徴的・権威的存在」としている。

このことについては、平成15年7月6日、

野田町での第21回例会において、既に堂込秀人氏が「中世山城跡の近世遺物」として発表している。堂込氏は発掘調査で出土した近世陶磁器、「吉田松尾之城」の絵図や古文書等から「重要な中世山城跡については、江戸時代にも管理され続けた」と主張した。

服部先生の講演であった歴史の反復性、すなわち大野城(四王司山)への昭和20年8月15日の人々の福岡城と福岡連隊、高良山城と懐良親王・今川了俊・大友宗麟等も、城が各時代を通じて非常事態には利用されるという重要な意味を暗示していると思う。

筆者は中世山城の調査に何度か関わったことがあるが、山地形の残存状況の良いことと、地域の人々の、私たちの城という思いの深さに驚くことがたびたびあった。また、破壊の時期についても、戦後の食料難における畑地開墾のための削平と昭和40年代以降における宅地造成によるものが多いように思われた。これらのことから、中世山城の中には近世のみでなく、明治以降、近現代まで、生き続けていたもの少なくないといっても過言ではあるまい。

講演会終了後、1階の居酒屋で有志による懇談会がひらかれた。服部・三木・鶴嶋・若山4名の発表者と県文化財課長吉永和人氏、次回開催予定の宮崎県木城町の白岩・椎・山内氏ら17名で芋焼酎で山城談議に花が咲いた。最後はクマ陣相良軍の鶴嶋氏が蛮声を張り上げて締めた。今回は昼も夜も単身乗り込んできたこの相良軍のモッコス鶴嶋にやられっ放しという感じであった。口惜しい……。

懇親会をお世話頂いた生涯学習センターの星田次子事務長と福田賢志氏に感謝の意を表して結びとしたい。

(平成16年3月3日 ひな祭り EXIT)

相良軍派兵地とクマ陣・クマ城

鶴嶋俊彦

1 はじめに

去る1月31日、鹿児島市で開催された本研究会第22回例会で、「相良軍派兵地とクマ陣・クマ城」と題して発表を行った。その主旨は、「南九州一円に分布する熊・隈・求麻・球摩・九万などの漢字を使用したクマ陣・クマ城という城郭のほとんどが、中世期に肥後国球磨郡の相良氏に統率された球磨衆(=相良軍)の派兵先となり駐屯した城郭である」というものである。

発表の主旨に変更はないものの、城郭の追加や年代修正があり、出席されていない会員諸氏もあろうから、再度簡単に本誌上を借りてその要旨を概説しておきたい。

2 クマ陣・クマ城の分布

熊本県南部から鹿児島県全域・宮崎県南部の南九州一円にわたり、管見で16箇所のクマ陣・クマ城地名(城郭名)を収集した。

これらの城郭の所在地には一次史料こそ少ないが、編纂史料なども猟渉すると球磨衆=相良軍の派兵先や知行地であったことを示す記事や関連記事が存在し、クマ陣・クマ城が相良軍の派兵先であったことを指摘できる。

古代から肥後国球磨郡は、球磨・球麻・久万・求麻・熊と表記されてきた。各地の「クマ」も、球摩・求麻・隈・熊・九万などの文字で表記されているが、クマ陣・クマ城は球磨衆=相良軍の派兵に起因し築城・使用された城郭であることを伝承した地名と言える。

相良軍の軍事活動全体から見た位置付けが重要と思われるので、付表・付図には、クマ陣・クマ城と呼ばれる城郭が認められない3ヶ所の派兵先についても併せて記入した。

3 派兵と城郭の年代

編纂史料によって推定されるクマ陣・クマ城の築城・使用年代は、永和元(1375)年から天文3(1534)年までの1世紀半にわたるが、その間に二つのピークがある。14世紀末から15世紀第1四半期の応永年間と、15世紀第3四半期の文明年間である。相良氏の当主で言えば、前者が前頼・實長・前統の3代、後者が為統の時代となる。

応永期前半には薩摩国の渋谷一族との共同歩調が目立ち、入来院合戦や鶴田合戦などの救援として派兵し、奥州家の島津元久と対立したが、応永期後半には奥州家の久豊を支援し、山門院知行に成功している。

15世紀半ば、相良家は永留長統によって篡奪され、長統は島津忠國と真幸院・葦北郡で対立した。

つづく文明期の為統の時代には、島津一族の抗争での救援や菱刈出陣によって、牛屎院を知行し、文明17(1485)年の飢肥合戦では飢肥城主の新納忠統の求めに応じて救援に出張り、伊東祐国勢に対抗している。

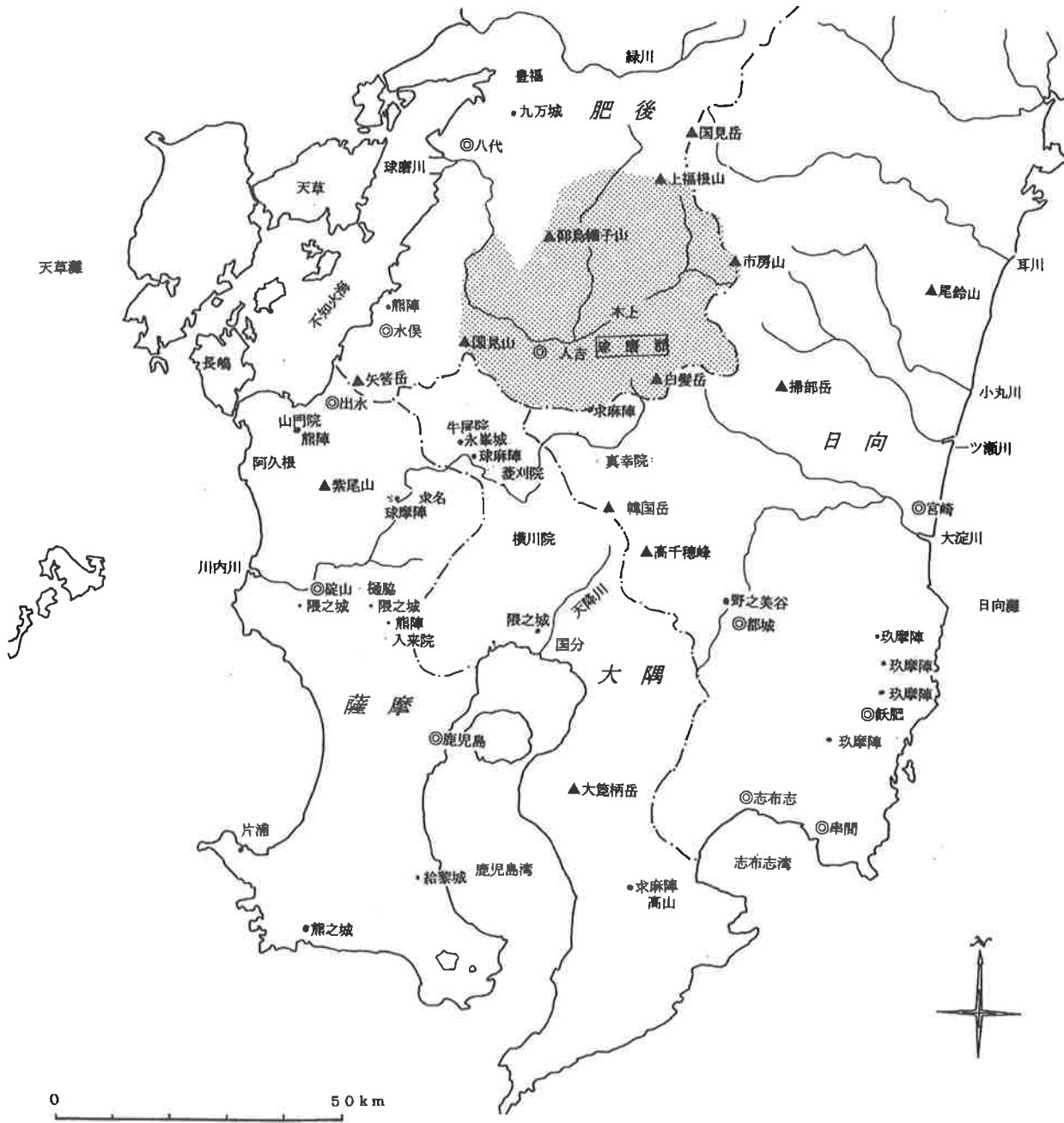
4 派兵の背景にあるもの

中世前期の南北朝内乱を契機に、在地の武士・武士団も動員の対象となり、広範な軍事活動に参加した。参戦する者の論理は、「一所懸命」、すなわち本領安堵と新恩地獲得であった。そして自力・実力による領地の獲得・保全策として多くの城郭を構えた。相良氏・球磨衆も例外ではなく、内乱期の始終にわたり軍事活動を行った。

14世紀末、内乱は一応終息し、所領獲得の外的機会が失われたかに見えたが、領土紛争はあらゆる機会に勃発し、動乱は休止する

ことがなかった。守護一国人体制のなか、武士の所領獲得は自己の裁量と努力に委ねられる時代になり、一揆と紛争を繰り返し、下克上や主家篡奪などによって弱者が淘汰・併呑され、やがて戦国大名を生み出した。

クマ陣・クマ城は、こうした南北朝内乱から戦国期にさしかかる時代に、所領の獲得を目的として南九州一円に広範な軍事活動を展開した相良軍団の動向を証明する城郭、と考えている。



付図 クマ陣・クマ城位置図

相良軍派兵地とクマ陣・クマ城

| 番号 | 陣・城名 | 別名 | 所在地 | 立地 | 推定築城年代 | 出典 | 参考 | 事項 |
|----|-------------|-------------------|--------------------------|-----------|----------------------|------------------------------|----|--|
| 1 | 隈之城 | 二福城 | 鹿児島県川内市隈之城町字城ノ下 | 独立丘 | 永和元年 1375 | 氏久公御講中 | | 永和五年(1375)、渋谷四郎、相良氏と結び伊久の鹿山城を攻める(鹿山合戦)。山北四ヶ所及び阿院(菱刈・牛くそ)、球麻各同意、率大軍来而圍鹿山城。 |
| ※1 | 野々美谷城 | | 宮崎県都城市野々美谷町字古城 | 台地端 | 落城年 応永元年 1394 | 北郷久秀講中 求麻外史 | | 応永元年北郷久秀攻落相良氏所領野之三谷城、討相良兵千町・牟田氏、明德4年(1393)、薩・隅・日大乱、相良前頼部城を守る。翌応永元年、前頼兄弟戦死。 |
| 2 | 熊陣 | (春昌寺署ノ陣) | 鹿児島県薩摩郡入来町副田字向山 | 山頂 | 応永3年 1396 | 清色菴鑑 西藩野史 鹿津野史 | | 清色城の向かい側の山頂。応永3年嶋津元久、入来院重頼の本拠清色城政勢、入来院重頼、救援を相良前頼に請ふ。猪兵衛利花北で元久重と合戦。重頼、清色を回復。応永4年、元久の日備兵が春昌寺峯などに砲撃を構え清色城を囲む。入来院重頼降伏。 |
| 3 | 隈之城 | | 鹿児島県薩摩郡樋脇町塔之原字隈之城段 | 台地端 | 応永3年 1396 | 鶴翁公御講中 | | 応永3年渋谷重頼、嶋津伊久に樋脇城などを攻撃される。 |
| 4 | 球麻陣 | | 鹿児島県薩摩郡樋脇町樋脇町 | 山頂 | 応永8年以前 1401 | 西藩野史 嶋津野史 | | ※応永27年、周頼(相良前頼?)、渋谷三郎五郎重頼に名字書出「入来院文書」。 応永8年嶋田合戦(嶋津元久、鶴田氏軍対嶋津伊久・渋谷四郎)。相良氏、伊久軍を救援。 相良諒岐守自頼の二百騎、トビノ鼻の乾に構える。 東頭庵に字城(城ヶ段)あり、土塁あり。旧球麻街道脇に「相良どん」と呼ぶ宝徳4年の五輪塔あり。 |
| 5 | 球麻陣 | | 鹿児島県伊佐郡菱刈町下手字比良田 | 台地端 | 応永9年以前 1402 | 三國名勝図会 菱刈面院古雄徴(写) | | 応永9年、菱刈花北で、相良前頼と嶋津元久が合戦。 |
| ※2 | 給繫城 キル | | 鹿児島県鹿兒島郡喜入町中名字城山 | 台地端 | 派兵年 応永21年 1414 | 嶋津野史 応永記 義天公御講中 | | 応永21年8月、「頼久乗勢入給繫城而守之、会球麻運兵助公(久豊)」。 応永21年8月、「匠作方二八従求麻大勢馳付島利(キヨリ)」。 応永21年8月、嶋津久豊の勢に、「自ら求麻登軍衆馳至当地」、伊集院頼久逃亡す。 |
| 6 | 熊陣 | (新城) | 鹿児島県鹿兒島郡野田町上名字熊陣 | 台地端 | 応永29年 1422 | 相良家文書231・319 | | 応永29年、山門に総州播磨より、薩摩衆・相良衆付陣。城落去により、知行。村山備前守指置き、25年格殺。隣接した高台に「新城」の遺構あり。 |
| 7 | 熊陣 (熊陣山) | 熊之牟礼 熊峯 | 熊本県水陸市字陣山・熊峯外 | 山頂 | 宝徳3年頃 1451 | 肥後國誌 水陸城攻図 相良文書192・195 | | 宝徳3年(1451)、菊池為邦→相良長統「當知行之地事、箇掌不可有相違状如件」相192 長祿4年(1460)、菊池為邦、相良長統に「守先例之旨」芦北郡の安堵状(相195) |
| 8 | 球麻陣 | | 宮崎県えびの市坂元字高野 | 高原丘頂 | 康正元年頃 1455 | 三國名勝図会 求麻外史 | | 内徑70mの不整形。外周を土壁で囲む。 「相良氏の城址」 康正元年頃、嶋津忠國が高野に陣、相良氏と合戦。 |
| 9 | 隈之城 | 築隈城 三ノ戸 映隈城 | 鹿児島県鹿兒島郡内長郡牟人町内 | 台地端 | 文明8年 1476 | 三國名勝図会 相良家文書223 | | 正宮山より東卯方四町許りにある山、隈之城の中、高き所を笑隈という。 勝岳公(氏久)の姫木・清水阿城攻めの時、笑隈に陣す。 文明8年、嶋津季久宮内周辺での軍略に相良為統の加勢を頼む。 |
| ※3 | 永峯城 | 新城 | 鹿児島県鹿兒島郡大口市里字新城 | 台地端 | 文明8年 1476 | 相良家文書224・226 大重軍国軍忠状 | | 文明8年、相良為統は舅の菱刈氏を救援。文明11年、牛屎太郎、深田に知行。(牛屎院文書) (牛屎城の窟の)永峯に付陣し、長々と在番。 文明8年~明応8年まで相良氏知行。 |
| 10 | 熊之城 | | 鹿児島県枕崎市前河鼻 | 段丘上 消滅 | 文明9年 1477 | 三國名勝図会 | | 当該地は鹿見村。文明6年、嶋津(薩州)国久の持城に「鹿見城」がある(行脚僧雜録) 山之城の出丸とする。 大重軍国軍忠状案に、文明9年阿久根・片浦を擁て某城の番をする、とある。 |
| 11 | 玖摩陣 | 巡り尾城 隈陣 | 宮崎県日南市 | 尾根頂部 | 文明17年 1485 | 日向地誌 城郭大系 | | 文明17年、伊東祐国の肥肥城攻めの時、城主新納忠統が相良氏の援軍を配置、久摩陣と呼ぶ。酒谷と塚田を結ぶ山越え道の頂上にある。 |
| 12 | 玖摩陣 | 隈陣 | 宮崎県日南市 松永字隈陣 | 独立丘 | 文明17年 1485 | 日向地誌 日向地名録 | | 郷ノ原村案に「古岩(玖摩陣)あり 大藤村の東南、松永の堰上の邸嶺にあり。塚田に隣して字陣ヶ追地名、背後に犬ヶ城跡あり。 俗に玖摩陣と呼ぶ。 |
| 13 | 玖摩陣ヶ平 | | 宮崎県北郷町大藤字陣ヶ平 | 尾根頂部 | 文明17年 1485 | 日向地誌 | | 郷ノ原村古岩址の割註に「小潮坂ノ麓ニアリ俗に玖摩陣ヶ平ト呼フ、五壘アリ岩広一畝余峯陸東側山地との尾根道の通過地に位置する。切岸・小堀様堀切あり。 |
| 14 | 玖摩陣 | 富士原砦 ? | 宮崎県北郷町大藤字種原 日南市板敷字富士原 | 山頂 | 文明17年 1485 | 日向地名録 | | (松永)玖摩陣の北三十町許、西、字士の邸嶺にあり。俗に玖摩陣と呼ぶ。広き三畝。 距離が類似首の地名から北定。北郷町と日南市の境の山稜に位置し、峠道を抑える。 小規模堀切で尾根東側を切断する。割道の前平は狭い。 |
| 15 | 求麻陣 | 下丸陣 築ヶ城 | 鹿児島県鹿兒島郡高山市新富字下永山 | 台地端 | 永正3年 1506 | 高田野史 高山書伝記 本城之図 | | 永正3年、嶋津忠忠は肝原兼光の高山城を攻撃、相良長毎の次女肝原兼朝に嫁ぎ、新富村条、下丸之陣(中略)山ノ成ノ外新二接乎手、我陣陣ト申傳タリ、事詳ナラス。城跡はシラス採取中。高山本城に球磨の相良氏在番の諸將が籠城したという「球麻屋敷」あり。 |
| 16 | 九万城 | 高嶺城 | 熊本県下益城郡小川町北海東字九万城 | 山頂 | 天文3年 1534 | 八代日記 | | 大永6年10月19日、当国一同にて鷹沼に籠陣し、2月29日開陣。 天文3年、閏1月16日たかの峯城取籠立。2月10日長唯様始たかみね城に御在城。 |

※1~3はその他の派兵地

【新入会員】

(4月25日現在)

眞鍋 光尚

博物館施設オープンの御案内

この度、下記の2施設がオープン致しましたので、お知らせします。是非、会員の方々も足をお運び下さい。

宮崎県立西都原考古博物館

(1)所在地 宮崎県西都市大字三宅字西都原西5670番地
TEL 0983-41-0041

(2)交通案内 東九州自動車道西都ICより車で10分

(3)みどころ 古代日向の歴史を考古学の思想に基づきストーリーに沿って謎解きを展開する「考古博物館」と、様々な情報を検証する「考古学研究所」で構成されている。

展示物に直接触れることができる。

坊津歴史資料センターましんかん輝津館

(1)所在地 鹿児島県川辺郡坊津町坊9424-1
TEL 0993-67-0171

(2)交通案内 JR指宿線枕崎駅から車で20分

(3)みどころ 日本三津の一つとして知られる坊津の海外交流及び一乗院関係資料。

◆◆新刊紹介◆◆

書籍・機関誌等

・『小田原城』歴史街道スペシャル 名城を歩く18
PHP研究所 6月特別増刊号 540円

祝！

佐土原城跡 (宮崎県佐土原町)

きよ しき じょう あと
清色城跡 (鹿児島県入来町)

国史跡に指定される

機関誌3号原稿募集

<仕様>

1. A4判 縦書き 本文10.5歩
2. 1頁 1行33字×26行×上下2段組
=1,716字(四百字原稿用紙4.3枚)

<目次>

1. 論文 400字×50枚程度(図版註含)
2. 研究ノート 400字×20枚程度(図版註含)
3. 史料紹介 400字×5~20枚程度
4. 城郭関連文献一覧
5. 図書紹介・書評
6. わが町のお城拝見

*原稿提出は、印刷原稿とフロッピーをご一緒に提出ください。

*送付先 〒899-5421

鹿児島県始良郡始良町東餅田498

始良町歴史民俗資料館気付 下鶴弘

編集後記

◆第22号をお届けします。今号には大分市の坪根伸也氏から府内の研究報告を頂きました。感謝申し上げます。大友氏の館跡調査は、大変な成果を上げており、県・市を上げて取り組み、着実な研究成果が次々と報告されております。

2001年9月、国指定の記念フォーラムが開催された際に現地を見学させて頂いたが、島津氏が攻めてきた時の焼土層は、今だに目に焼き付いているほどです。今後の研究は、さらに深化することでしょう。

◆鶴嶋俊彦氏からは今回もご厚情を賜り、感謝申し上げます。原稿が集まらない中、貴重な研究成果です。また、出口浩二氏には臨場感溢れる例会報告を頂きました。有り難うございました。

◆次号の会報発行は、9月上旬の予定です。原稿は下記まで

(Shige)

重久淳一 〒899-5106 始良郡隼人町内山田1138-5

南九州の城郭 第22号

発行所 鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧内 上田耕 気付
南九州城郭談話会
(振替口座 02040-6-7850)

発行者 三木 靖

編集者 重久 淳一

印刷所 (株)トライ社

入会金500円 年会費2,000円